

氏名・(本籍地)	齋藤圓眞(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	乙第83号
学位授与の日付	平成22年3月15日
学位論文題目	渡海天台僧の史的研究
論文審査委員	主査 多田孝文 副査 多田孝正 副査 川勝賢亮

## 齋藤圓眞氏 学位請求論文審査報告書

### 「渡海天台僧の史的研究」

#### 論文の内容の要旨

本論文は中国唐・末代の天台渡海僧に関する研究であり、全体を6編で構成されている。

第1編、第1章では、円仁ら平安初期の天台僧が入唐した当時の唐末の時代背景を概観した。第2章も同様に、成尋ら平安中期の天台僧が入宋した当時の時代背景すなわち北宋初から中期、元豊の改革頃までの流れを逐って論じている。

第2編では、当時民間に広く流布した現世利益である僧伽信仰のありようと、そうした現況を現出した社会状況である水運の発展、さらには喫茶の風の拡がりという社会史的生活文化的側面を入唐入宋僧の日記に窺った。第1章では、僧伽という特に水難守護・航行安全守護の霊異僧との存在と、その信仰の根拠地となった泗州という水陸交易地としての特殊性、全国的な信仰の広がりの実態、民衆の切実な思いが反映される仏教信仰としてのありよう、その信仰の日本への伝播などを入唐入宋僧の日記をはじめ中国・日本の史実書等に頼った。

第2章では、第1章で述べた点が中国史上における水運の発達と不可分の関係にあるとし、先ず我国入唐入宋僧の中国内での動きの後足を逐い、長安・開封などに向かった全員がいわゆる大運河の道を辿ったと考えられることを実証した。次に、成尋の入宋が明州から浙東運河に入って杭州に向かったとすることが自明されてきた従来の研究成果に対し、成尋の日記を基に中国の地方誌や最近の地理研究所などを依用して、その行程の新説を提起した。また、従来見過ごされてきた浙東運河の実態、地方の小運河、開封の外港地陳流

について論究した。さらにこれまであまり論究されなかった宋西以前の外国での喫茶文化について論じた。

第3編では9章を設け、第1章では、円仁が実際に見聞した当時唐に盛行していた講経や法式儀礼の詳細について述べ、その実態を論じた。

第2章では、講経と同意である俗講の起源・意味・内容などに関する従来の研究が曖昧な結論のままで終わっている原因が、講経の場で用いられる講説の台本である変文が俗文学或いは民間文学成立の起源となつたとする中国文学史からするアプローチにあると見、これを仏教史の観点から捉えなおして論じ、俗講に対する従来の研究の問題点を指摘し、成立期を唐末とする提言を行った。

第3章では、平安期に盛んになった男女を問わず貴顕俗庶が参集し仏教と縁を結ぶ舍利会が円仁が唐での見聞に基づくものであるとして、その詳細を逐った。

第4章では、天台声明の祖とされる円仁が唐から伝えた講会や法式で唱えられる声明の特質について述べた。

第5章は、円仁が勧請した赤山明神の神格についてこれまでさまざまな議論がなされているが、そこに一石を投ずる把握を提示した。

第6章は、赤山法華院跡が発見され、地区への外国人の立入が認められるようになってすぐの、第1回目の踏査後の研究報告である。円仁が訪れた法華院周辺の他寺院などのその後の推移を踏査報告したものである。

第7章では、入唐僧の円仁と彼を外護支援する唐の在家仏教者の動きを鮮明に論究している。

第8章では、往路円仁の乗した遣唐使船団の復路は新羅船7隻で帰朝したという従来の考え方に対し、遣

唐使船第2船は使用が可能で帰路裸入国に漂着したものの少数名が帰朝に成功したこと、ライシャワー氏以来定説となっていた僊従の丁雄万が唐に置き去りにされたという誤解を、円珍入唐の際の鎮西府公驗。福州都督府公驗（いずれも国宝、東京国立博物館蔵）などを元に指摘論証し正した。

第9章では、円仁携行の日本の砂金と唐の砂金の両替比率・揚州における砂金相場、金剛界九会曼荼羅の功銭額の解釈に関し、外国研究者を含めさまざまに異論が提起されてきているが、それらを整理した上で一つの結論と思われるものを提起した。これによって『参天台五臺山記』に関しても巡礼資金の詳しい研究が行われるようになってきている。

第4編では、第9章を設け第1章では、成尋のこれまではほとんど論究のない法脈関係に焦点を合わせてその位置を確認し論究した。『参天台五臺山記』をより深く理解するために欠かせない論証である。

第2章では、入宋に際し携行した諸法門の種類を分析し、そこから入宋の目的とするところを探った。

第3章では、僧伽の本拠の泗州普光王寺とその周辺を描写する成尋の詳細ではあるが、読解に難渋する記述の理解を通じて僧伽信仰のあり方と当時の状況を把握した。

第4章では、先ず成尋の記録にあらわれる大陸沿岸に点在する島名と位置に関する研究に未解決な部分が多く、論義にも不十分な点が見られるので、一石を投ずる意味で自説を提起した。また、杭州から天台山に至る道程にあらわれる寺院などについて地方誌などを基にその解明につとめた。

第5章では、天台山から杭州・蘇州・揚子江岸の潤州までの道程の記述を辿った。その中で神宗帝による招聘で赴く開封への旅程の内容、訪れた運河沿岸の寺院と僧との問答、入宋先達天台僧にして現地に客死した寂照の居所普門院の状況と建立の経緯などを探り、成尋の記述上の不明点の解明を行った。

第6章では、開封の外港陳留の歴史と当時の状況を見、次に日記にあらわれる「鑠」が「鑠」の誤写で竹木務すなわち開封にはいる船に商税を課す役所がある地であること、入京直後に神宗帝に献上する香爐と念珠は、智顛が煬帝に献上した故事に基づくとの由来を調査することに費やした。

第7章では、成尋の記事が、日本僧が中国皇帝に召見された現場を伝える唯一の興味ある記録であることからその詳細を追った。そして、そこにあらわれる召見までの手続き、宮中への入り方、拝礼作法、賜与物、

僧侶の王者不敬の実際、さらには成尋への質問と返答の内容などを考察した。

第8章では、成尋の五臺山への入路と出路の詳細と円仁の行路との比較、大華嚴寺真容院文殊聖客殿内などの模様、目撃した五色雲、贈呈された菩薩石、そして奉納を依頼された後冷泉天皇宸筆の『法華経』と太皇太后亮藤原師信先亡夫人の髪と鏡の由来などの考察を行った。

第9章では、皇帝の勅命で祈雨を行った際、法華法を修した理由と真言の請雨法への言及、官吏の修法に関する問と応答、粉壇祈雨の沿革とその意味について考察を行った。

第5編では、4章を設け第1章では、真諦を仏法、俗諦を世間相として把握し、僧俗一体の法華一乗運動を展開しようとした最澄の意図するところをその菩薩僧観に見た。

第2章では、成尋に先立つ入宋天台僧で成尋もその故地を蘇州に尋ねた寂照のこれまで見過ごされてきた入宋前の軌跡を追った。

第3章では、最澄の入唐に五十年先だって鑑真と共に渡来した思託が『延暦僧録』中に示した菩薩。居士観を『辨正論』十代奉仏篇と比較しながら考察し最澄の菩薩思想へつながる先駆的側面などを探った。

第4章では、中国における居士号の沿革とその意味するところを考察し、思託が居士の一典型として芸亭居士の号を冠して伝記を記した石上宅嗣の軌跡を逐うことで、思託の意図する居士たるあり方を探った。

第6編は、本論者が既刊書、成尋撰『参五台山記』1～4巻に続く巻5の現代語訳記であり、資料編とした。

## 審査結果の要旨

近年、渡海僧の研究が再び各方面からなされるようになってきた。それはかつての文学や交通・地理・求法内容などという切り口からの研究をも含むさらに幅の広い研究である。

本論文は、これら先行研究を補完すると共に、入唐入宋天台僧を扱う史的研究である。すなわち、天台入唐僧円仁の『入唐求法巡礼記』および成尋の『参天台五台山記』に関する詳細な文献考察と史的論証の成果をもとにしてまとめられたものである。

彼ら入唐僧の見聞した中国における仏教および民間・民俗信仰とその日本への影響等のもとより、中国の地理・交通・経済・文化を論じ、古代日中文化交流史の一端を解明した優れた研究であるとともに、当時の中国の信仰や社会現象を知る上でも貴重な論及がな

されている。

円仁・成尋を中心に置いて、渡海時の事跡を克明に辿り、出来得る限り明らかにしようとしたその努力には敬服する。その限りに於て本論は十分な成果を挙げ得たと考える。

しかしながら、その上更なる研究を進展させてもらいたいと期待する。

例えば、泗州大師僧伽信仰について、現世利益の一断面として切り捨てず、唐代の中国文化の中においてどのような位置付けられるのか、中国人の日常宗教生活を語るものなど、幅広く文献を調べ、語ってもらうとずっと躍動感のある興味あるものが出来上がると思う。

そのことは、俗講と講経、舍利会などについても云えることであろう。仏教学の学者はまだ、広大な文化の中から仏教を語るという修法に慣れておらず、教理・教学の面から究明することで、事足りりとしている感じが否めない。その点では本論第5編で論じた“思託が見た日本の居士については”読むものを納得させる力を持っている。是非、このような修法を用いて、仏教の史的研究を続行して欲しいと希望する。さらに、史学的視点から注言すれば歴史学の世界では、日々発掘や新資料の発見などによって学説は日進月歩の観がある。この論中にも歴史的には少しく改めなければならないところが見られる。日々史学の発表に注目し続けることが望まれる。

本論は、主に円仁と成尋の旅行記を通して、今まであまり顧みられなかった当時の中国の生き生きとした仏教信仰や文化社会現象を解明すると共に、古代における日中仏教交渉を再検討し、教理教学に偏りがちな日本仏教研究にも新たな視点を投じたものである。

本論文の評価すべき点は、

1. 人唐入宋両方を扱って、その仏教史上の意義を考察、前述の要旨に示したように、先行説の訂正、あるいは新説を論証している。
1. 入唐人宋の記録についての具体的な記事の検討を行おうとした努力を認めることが出来る。
1. 記録の扱いについては、出来るだけ文献を広く収集しようとした意図と考証力を認める。
1. 内容的には入宋の成尋阿闍梨について、新知見が付加され各編各章ごとに、旧説の誤りを訂正、新見解を論証したことなどの意義を認める。

論者は可能な限りの関連資料と従前の諸研究の再検討を踏まえて考証されている。旅行記研究の方法論というものは、このような豊富な問題意識と、地味で着実な検討作業による以外にはないのではないか。

以上、本論文は学位請求論文として十分に認め得るものである。